

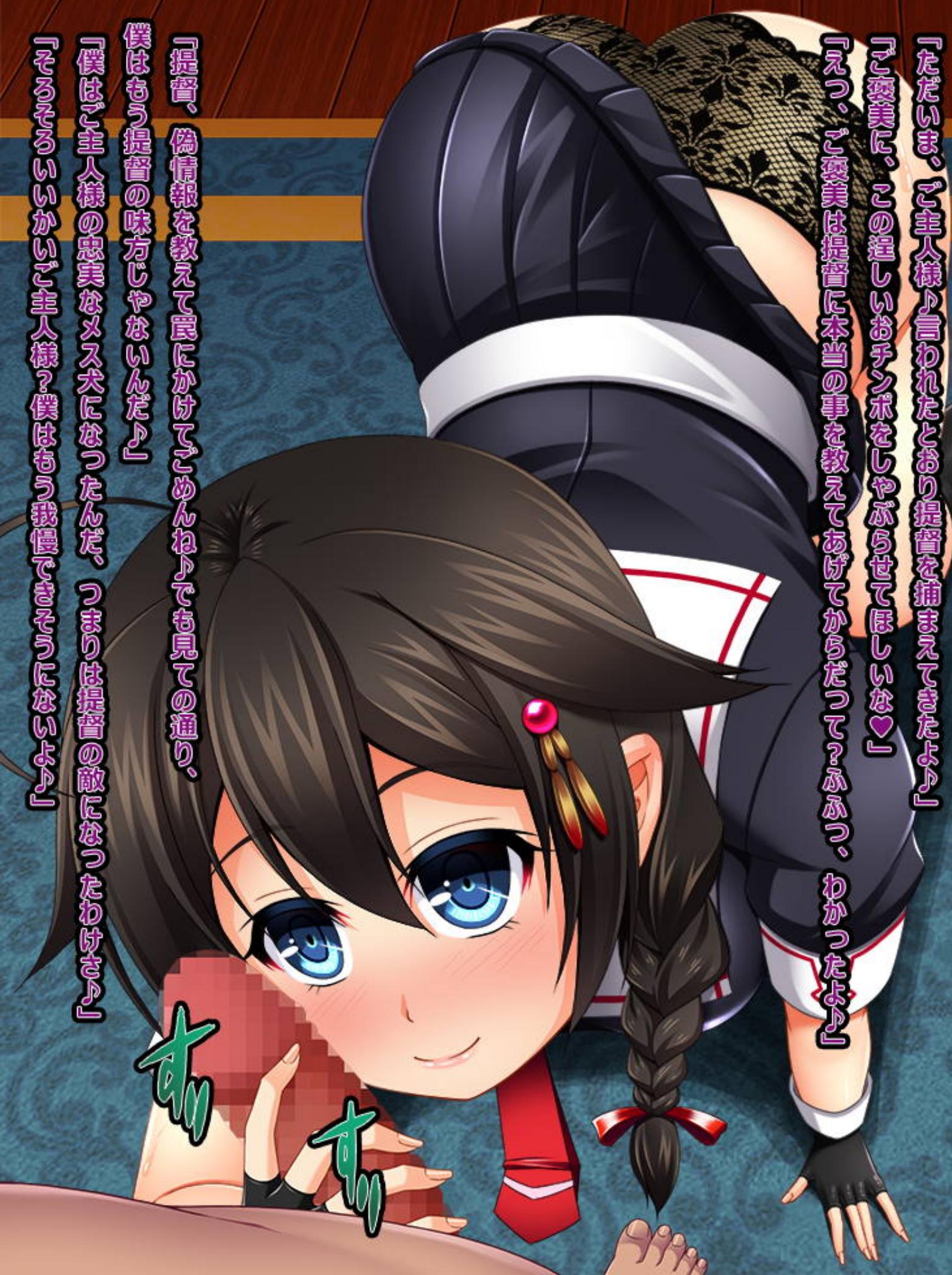
「ただいま、ご主人様♪言われたとおり提督を捕まえてきたよ♪」

「ご褒美に、この逞しいおチンボをしゃぶらせてほしいな♥」

「えつ、ご褒美は提督に本当の事を教えてあげてからだつて？ふふつ、わかつたよ♪」

「提督、偽情報を教えて戻にかけてごめんね♪でも見ての通り、
僕はもう提督の味方じやないんだ♪」

「僕はご主人様の忠実なメス犬になつたんだ、つまりは提督の敵になつたわけさ♪」
「そろそろいいかいご主人様？僕はもう我慢できそうにないよ♪」



「ふふつ、ありがとうございます♪それじゃあ、いただきます♥」

「あ～む、んつ、んちゅ：おひいよ、ごひゅじんさま♥

「んちゅ：あつくて：僕のくちの中でピクピク跳ねてかわいい♥」

「じゅつぼじゅぼつ、ちゅ、ちゅぶつ！じゅつぼじゅつぼつ、うらやましいかい、提督？」

「そうだよね、提督はまだ女の子とセックスもしたことのない童貞なものね♪」

「でも僕がご奉仕するのはご主人様だけなんだ、だから提督にはしてあげられないんだ、残念だったね♪」

「ご主人様、そろそろ出そうかい？それなら最初は僕のお口に出して欲しいな♥」



「んつ、んぐつ…んぐー！ んつ、んんつ…んぐ、んぐ…、ごくつ…ごくつ…ぶはあつ」

「ふふつ、たくさん出たねご主人様♥とても濃くて美味しかったよ♥」

「わあ、出したばかりなのにまだこんなに固い♥ふふつ、見えるかい提督？これが上に立つ者の器だよ♪」

「たとえ反抗的だろうと、圧倒的な快楽で女の子をひれ伏せさせて、メス奴隸にするおチンポ♥」

「僕もこのおチンポで女の子から一匹のメスに変えられたんだ♪」

ドロカ…

ペロッ

「こんなに言つてゐるのにまだ信じられないかい？だつたら僕の本当の姿を見せてあげるよ♪」

「どうせ一生、牢屋生活だろうからオナネタに困らないよう、
僕のエッチな格好とエッチな行為をたっぷり見せてあげる♪」

「ご主人様に出会うまで僕を育ててくれた、提督へのプレゼントだよ♪」

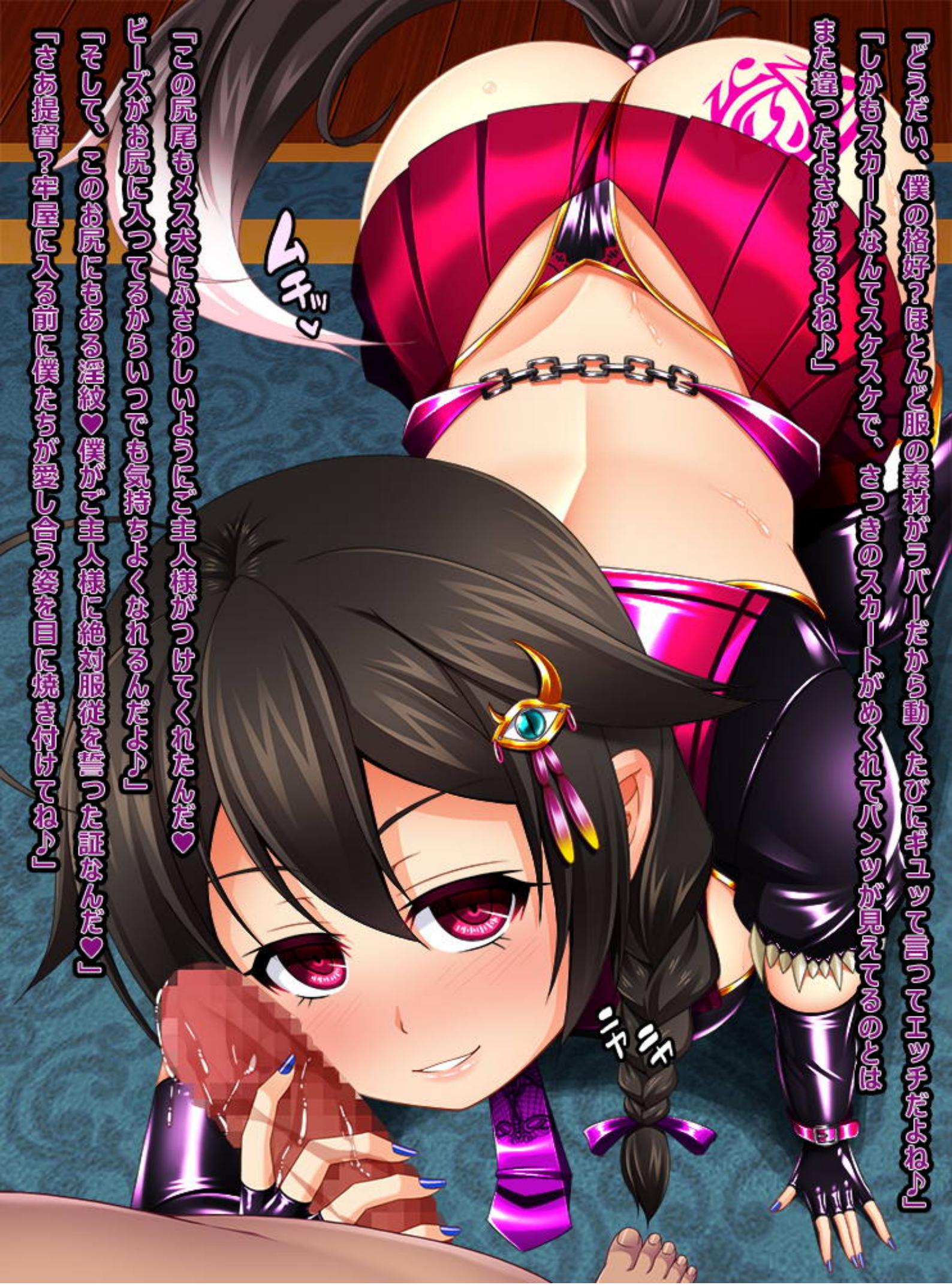
「どうだい、僕の格好？ほんと服の素材がラバーだから動くたびにギュッて言つてエツチだよね♪」

「しかもスカートなんてスケスケで、さつきのスカートがめくれてパンツが見えてるのとは
また違つたよさがあるよね♪」

「この尻尾もメス犬にふさわしいようにご主人様がつけてくれたんだ♥
ビーズがお尻に入ってるからいつでも気持ちよくなれるんだよね♪」

「そして、このお尻にもある淫紋♥僕がご主人様に絶対服従を誓った証なんだ♥」

「さあ提督？牢屋に入る前に僕たちが愛し合う姿を目に焼き付けてね♪」



「待たせちゃつたかなご主人様？ふふつ、それなら僕も精一杯ご奉仕するね♥

「れえうる、れれえう…あう…れるつ、れろれろ…さつきの精液の残りと僕のよだれで少し臭うね♥」

「うん、この臭いはとてもすてきだね♥もつと味わいたくなるよ♥」

「はむつ♪じゅばつ！じゅばつ！じゅばばつ…じゅっぽ、じゅっぽお…んつ、んつふ、じゅっぽ」

「あく…れるつ、れろれろ…べろろつ、べろん、べろんつ！」

「どうしたのご主人様、少し物足りなくなつてきたかな？」

「ふふつ、それならこんなのはどうだろう♪」

「ちゅ…ちゅぢゅるるるつ！ちゅつちゅ、ぢゅつちゅ、ぢゅぢゅつぱ！」

「ちゅつ、ちゅづ、ちゅじゅるるつ！」

「どうかな？お口をすぼめてバキュームフェラ♪

下品な顔でむしゃぶりつく姿がいい？ふふつ、ありがとう♥」

「じゃあ、続けるね♥じゅるるるつ！じゅずずずつ：んつ！んつ！んぐ、ちゅぼちゅぼ！」

「じゅつぼ、じゅつぼ…じゅるるるつ、じゅぞつ！じゅぞぞぞつ、じゅぼぼつ！」

「出そう？ご主人様が気持ちよくイケるようにもつと激しくしてあげるよ♥」

「じゅばつ！じゅばつ、じゅつちゅ…じゅるるるつ！じゅばば！じゅぞーじゅぞぞぞぞつ…：んつ！」

「びゅつびゅーってご主人様の精液が僕の顔を染めていく…すごい♥♥♥」
「はあつ、はあつ、しゃぶつてただけなのに僕もイッてしまつたよ♥」

ぬちゅあ～

「くんつ、くんつ、この臭い…頭の中がクラクラする♥このまま髪に臭いを染みこませたいくらいだ♥」
「ふふつ、わかってるよ♪髪はちゃんと洗うさ♪ご主人様は発情したメスの臭いのほうが好きだものね♥」

「あつ、待つてご主人様、尿道にまだ精液残ってるみたい♪」

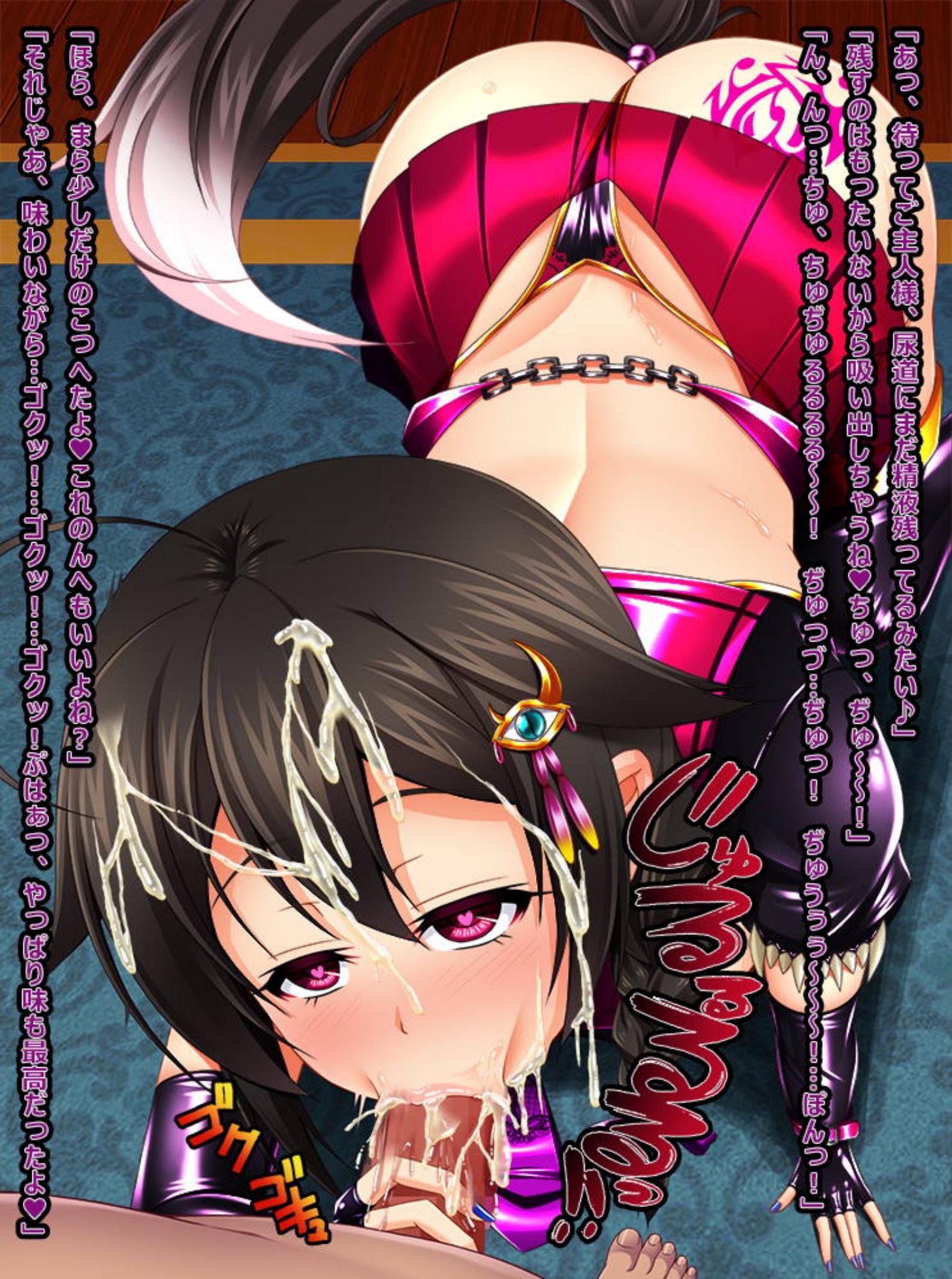
「残すのはもつたいないから吸い出しちゃうね♥ちゅつ、ちゅ～～！」

「ん、んつ…ちゅ、ちゅぢゅるるる～～～！ ちゅづ…ちゅつ！ ちゅううう～～～！」

「ほんつ！」

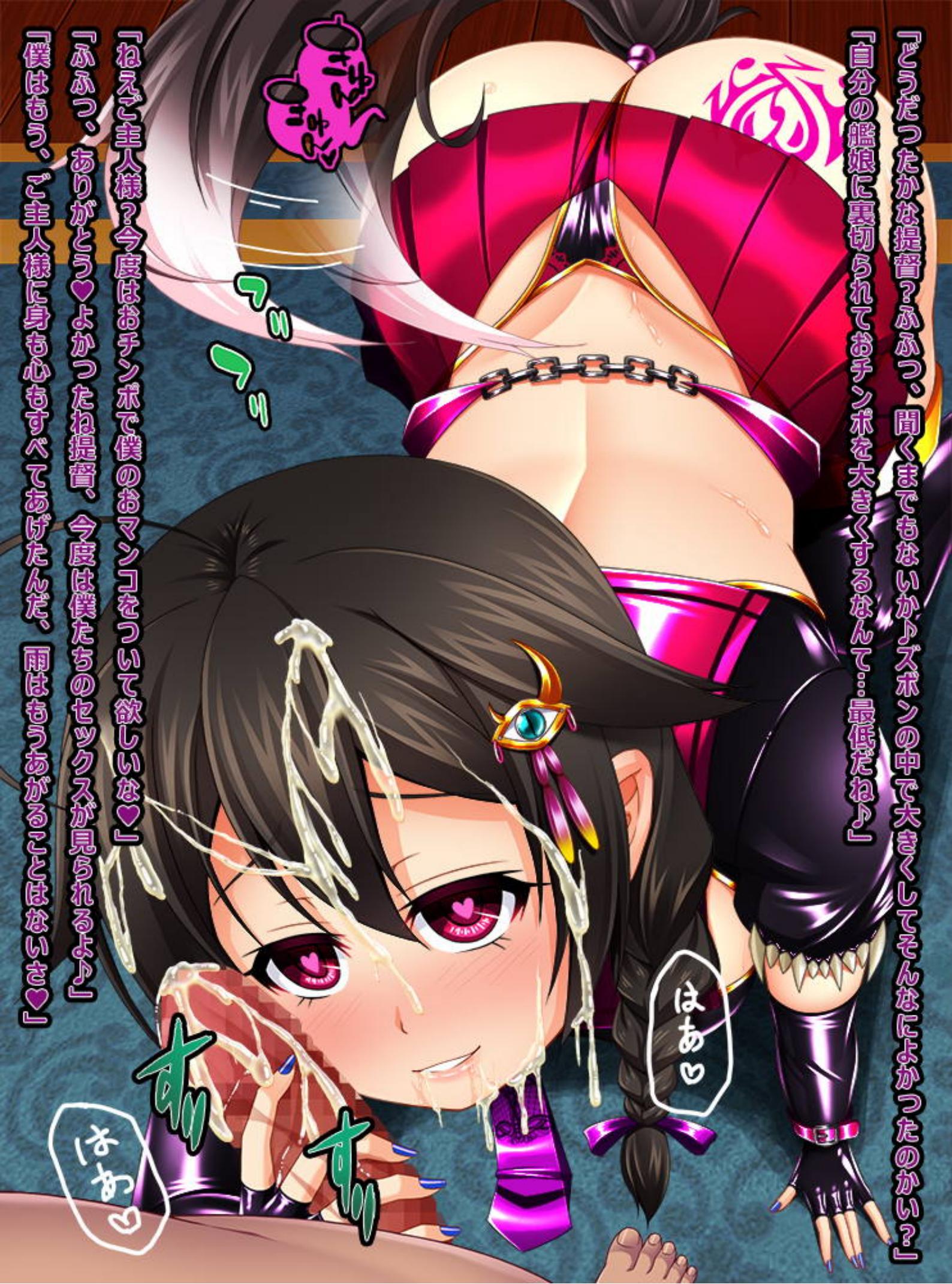
「ほら、まら少しだけのこつへたよ♥これのんへもいいよね？」

「それじやあ、味わいながら…ゴクッ…ゴクッ…ゴクッ…ゴクッ…ふはあつ、やつぱり味も最高だつたよ♥」



「どうだつたかな提督？ふふつ、聞くまでもないか♪ズボンの中で大きくしてそんなによかつたのかい？」
「自分の艦娘に裏切られておチンボを大きくするなんて…最低だね♪」

「ねえご主人様？今度はおチンボで僕のおマンコについて欲しいな♥」
「ふふつ、ありがとう♥よかつたね提督、今度は僕たちのセックスが見られるよ♪」
「僕はもう、ご主人様に身も心もすべてあげたんだ、雨はもうあがることはないと♥」



「うー、この私が捕まつてしまつとは…油断したデース」

「汚い手で触らないでくだサーアイ！私に触れていい男性は提督だけネ！」

「な、なに私のお尻にこすり付けてるんデスか！？」

「まさかソレを私に入れる気デスか！？」

「その前に準備がある？何をする気か知りませんが、

ソレを入れたらタダジやおかないネ！」

「何デス、その目隠しみたいなものは！？ソレを私に着けてどうする気デス！」





頭の中がアラヤハチヤにがまくされてしまう

「えつあなたの女になつたら外すデスツテ!?」

なつてきました…」

何言つてるデース、私の全部は提督の物デース】

伝言で元ノアの名前は撒督の物元ノア

「どんな事をしても、それだけは変えられないネ！
私が他の男になびくなんて絶対ありえないネ！」

「なんだつたんデスか？あなたは何がしたかつた…つて、**提督！？**

「なんでこんな所にいるんデース！？」

「だつて私は敵に捕まつてさつきまで、あれ？」

「でも今いるのは間違いなく提督だよネ？」

「ダメデース、まだ頭がボーッとして考えがまとまらないネ、

もしかして今のは夢だつたんデスか？」



「えつ、私を抱きたい？ふわあ！提督うー！」

「やつと私の「のくに」気がついてくれたんデスネ♥」

「もちろんデース♪私は提督が望むならなんでもしてあげマース♥」

「んああああああんつ、提督のが私に入ってきたネ♪」

「なんだか提督のおチンポ、前より大きくなつてます！」

「逞しくてこつちのほうが好きデース♥」

「提督の好きなように動いてくだサーア♪

あんつ、あんつ、はあんつ、すごいデース♥」



「今日の提督はいつも以上に魅力的デース♥」

「いつも届かないところを突かれて私もイツちやいそうネ♥」

「ダメダメ、そんなに奥ばかり突かれた本当じ…」

「いくうううううううううううううつ♥♥♥」

「はあ、はあ、本当にどうしたんデスか提督うふ、まるで別人みたいにエッチが上手になつてゐるね♥」

「んつ、なんデスか提督？そんなに真剣な顔をして…』

「提督と一緒に軍を裏切つてほしい！？な、何を言つてゐるんデスか！？」

「私は軍に洗脳されて、都合のいいように使われてた、提督だと思つてた人も実は偽者！？』

「そんな、本当なんデスか提督！？
……すぐには整理できないけど、提督の言う事だから私は信じるね！』



「提督、何デスかこれは！？」

「えつ、軍に対抗するために私を改裝するんデスか？
…わかりました、提督は私が守つてみせマース！」

「これすごいネー！」

今までとは比べ物にならないくらいパワーが沸いてくるヨーー！」



「WOW! これが新しい私デスか? すごいネー!」

「本当の私になれた気がシマース♪」

「服装はエッチだけど、提督が喜んでくれるなら問題ないネー♥」

「えつ、提督はもう、提督? ジやないから他の呼び方のほうがいいって? んう提督じやないならなんて呼べば?」

「ご主人様? そう呼べばいいんデスか? なんだか完全に私が提督のものになつたみたいでいいデスネー♥」

「じやあ今後はご主人様と呼ぶネー♥ ところでご主人様あ~♪ まだ主人様は射精してないよネ♥」

「新しくなつた私を使って気持ちよくなつてくださいサーアイ♥」



「あんつ、あんつ、あんつ、激しいデース♪ご主人様あ♥」

今まで一番気持ちいいデース♥」

「子宮の入り口をコツコツ突かれる大好きネ♥

ああんつ、もう軍の規則なんて関係ないから

時間と場所をわきまえないとエッチができるヨ♥」

「あんつ、今度は浅いところをクリクリされてる♥これも好きデース♥」

『ご主人様あ、もし射精するなら私の中にくだサーアイ♥』

子宮でご主人様を感じたいんデース♥』

「あんつ、はあん、ああんつ、やあんつ、ラストスパート、とっても激しいネ♥

私の中が壊れちやいそうだヨ♥』

「私もイクネ! イク、イクイクイク~~~~~♥♥♥♥』



「はあつ、はあつ、んんうつ、すごいヨー♥

「おなかがパンパンになるくらい射精してるね♥」

「ご主人様あ～、私今一番幸せだヨう♥こんなに出したのに、

私の中でおチンポがまだ出したりないって言つてるみたいに固いままデース♥

「私の全部はご主人様の物なんだから、

射精したくなつたらいつでも私の体を使ってくだサーカ♥

「ご主人様が望むことは全部してあげたいデース♥

望むなら妹達にもこつちに来るよう誘つてみマース♪』



「えつ、様名はすでにここにいるんデスか？」

もう、様名も人が悪いデース、何で私を誘つてくれなかつたノー！」

「じゃあ、次は様名と一緒に姉妹丼なんてどうデース? 私も様名と久しく会つてないから楽しみデース♥」

「私はご主人様が愛してくれるなら、他に何人女がいようがかまわないネ♥」



「でもご主人様を想う気持ちは誰にも負けるつもりはないヨ♥」「
と云うわけで様名も誘つて一緒に Burning Love...」

「ふふつ、どうしたんだい司令官?」

「たしかに、司令官の前でパンツを見せながら足を開くようなことは普段の私ならしないだろうね♪」

「偽者? なにを言つているんだい? 私は響だよ、ほらこの指輪だつて司令官がくれたものじやないか」



「そんな事よりいいのかい? 私のパンツを見ただけでビンビンになつてるソレを放つておいて♪」
「ふふつ、私がスッキリさせてあげようか♪」

「これが司令官のおチンチン…なかなか立派じゃないか♪」

「どうだい？ニーソの生地と私の柔らかい足の感触は？」

「その表情を見ると気持ちいいみたいだね♪それならこれはどうだい？」

「ほら、親指でお口のところをクリクリ♪ふふつ、体がピクピクしてきたね♪」
「それじゃあ、今度は早くしてみよう♪」



「んつ…司令官、全身が震えてるよ♪すごく気持ちよさそうだね♪」「やめてくれって？ふふつ、やめるわけがないじゃないか♪」

「私はそうやって、理性と欲望の狭間で耐えている顔が好きなんだ♪」

「ほら、私も興奮してきて、パンツがビショビショになってしまった♪」「出したくなつたら出していいんだよ、気持ちよく射精してごらん♪」



「ハラシヨー♪なかなかの量が出たね♪」

「んつ、どうしたんだい？：ふむ、射精して冷静になつてしまつたか♪」

「でも、本当に私は司令官のケッコン艦、響だよ」

どう



「いや、正確には『元ケッコン艦かな♪』
『まだわからないかい？司令官の艦娘、響はご主人様に寝取られてしまつたんだよ♪』
『そして私が司令官とこうしているのもご主人様の計画のうちさ♪』
『そして私が司令官とこうしているのもご主人様の計画のうちさ♪』

「こここの職員は全員私が籠絡して、残っているのはこここの艦娘と司令官だけだよ♪」
「フフの艦娘全員を相手にするのはさすがに私でも、辛いからね♪」

「だから、鎮守府の艦娘以外の人間を籠絡して、

誤情報で民の仕掛けてある海域に少しずつ艦娘を誘導しようつて計画を♪」
「ふふつ、信じられないかい？だつたら見せてあげるよ♪」

「これが、司令官を裏切つて生まれ変わった私さ♪」

「ご主人様に司令官さえ入れたことのないおマンコを無理やり犯され、
快楽の海に沈められてしまつた姿♪」

「大切にしていた艦娘を寝取られて悔しくないのかい？」

「ふふつ、こんな状況になつてもおチンチンはビンビン、変態だね司令官♪」

「それじゃあ、その変態ロリコンおちんちんをまたイジメてあげよう♪」



「ほら、どうだい？さつきと違つてハイヒールだから痛気持ちいいだろう？」

「カリ首のところをハイヒールの先でコリコリすると…ふふつ、おチンチンがすぐくはねている♪」



「司令官はどうしようもない変態だね♪自分を裏切った、

しかもこんな小さい女の娘に足でいいようにされて喜ぶなんて♪」

「ふふつ、もうちよつと激しくしてみようか♪」

「ふふ、いい返事だ♪ハラショード♪」

「ほらつんつ、足でされるのは支配されているみたいで気持ちいいかい？」
「変態ロリコンなうえに、ドマなんて…救いようがないね司令官♥」

「んつ？もう出てしまいそうなのかい？私のいう事には逆らわないと誓うなら出させてあげよう♪」
「もし、イヤだつたら足を止めて、もう司令官のおチンチンには二度と触らないけど、どうする？」



「さつきよりも、量が増えて顔にまでかかつてしまつた♪あむつ…じゅるるつ、うん、いい味だ♪
「ふふつ、そんなに私の奴隸になれたことがうれしかつたかい♪」

「それじゃあ、早速指令を出してもらおうかな♪
まずは第六駆逐隊をこの海域に出撃させてくれないかい♪」

ザキるる

「んつ、どうしたんだい？」
「そんな、困った顔をしてまさかさつきの約束を忘れてしまつたのかい？」



「ふふつ、逆らうなら好きにすればいいさ♪ そうなつたら、私一人でココを破壊させてもらうよ♪」

「全員を相手にするのは辛いとは言つたけど、殺さずに手加減するのが辛いだけだからね、
できれば大ごとにはしたくないんだ、ご主人様にも怒られたくないしね♪」

「それに逆らうなら、腹いせに司令官の金玉は踏み潰させてもらうよ♪」

「さて、どうするんだい司令官？」

「司令官の金玉を私につぶされて、さらに大切な艦娘が死んでいくのを見たいか

それとも私に従つて、艦娘をご主人様に捧げるか？」

「ふふつかあ、どつちがのぞみかな？」



「イラシカラブテ、ご主人様ただいま戻りました！」

「はい！ご主人様の計画通り我が鎮守府の艦娘達は神威特製のジュースのおかげで、戦意が下がってきていています♪」

「薄めて飲ませていたのですが、中毒になる娘も出てきてそういう娘には直接原液を飲ませてあげてます♪」

「そのおかげで、資材がすぐ枯渇してしまつて：」

あの、また補給をお願いしてもよろしいでしようか？」

「ふわああ♥アイライケレ♪」

「ふふつ♥いつ見てもご主人様のおチンポは立派です!』
『私のおマン♪も補給してもらえるのがうれしくて、グチョグチョになつてきました♪』

「ああ、もう我慢できません!入れちゃいますね♥』



「ふわあ♥入つてきました♥♥♥すごく気持ちいいです♥」

「んつ、ご主人様は動かなくとも大丈夫ですよ♪

神威がきちんと動いて気持ちよくさせて見せます!」

「あん、はああん、あんつ、気持ちいい♥やあん、んあああん♥」

やん♥

あ♥

「奥にゴリゴリ当たつて、子宮がキュンキュンしちゃいます♥ご主人様はどうですか?」
「ふふつ、よかつた♥ではたつぶり私の子宮に補給してくださいね♥」

「はああああん♥♥♥すごいです♪こんなに出されたら、私も…」

「んつんんんんうつ♥♥♥」

「はあっ、はあっ、私もイッちゃいました…♥」



「あんつ♪ご主人様とのエッチが気持ちよすぎて、力が制御できなくなつてきました♥」

「折角偽装したのに、んつ♥本来の姿に戻っちゃいます♥』

「はあつ、はあつ、偽装が解けちゃいましたね♥」

「この姿、皆さんに見られたら大変ですよ♪私がスパイってバレちゃうじゃないですか♥」

「ふふつ♪少し力を使ってしまいましたし、また補給をお願いします！ご主人様♥」



「ああんつ、ひやんつ、はああんつ、

さつき出してもらつた精液がローション代わりになつて、んんつ
すごく気持ちいいです♥」

「やあんつ♥、ご主人様も動いてくださるんですか?ふふつ、アイライケレ♥」

「んんつ♥同じリズムで腰を振つてると、頭が痺れてバカになつてしまいそうです♥」



「きやつ！もう、ご主人様！急にリズムを変えるのは反則ですよ♪」

「あんっ、あんっ、ああ、はあんっ、激しいです♥
こんなのすぐにイッてしまします♥」

あんっ♥

はあんっ♥

やあんっ♥

「ご主人様も出そうですか？
はい、お願ひします！また、たっぷり私の中に注いでください♥♥♥」

「んあああああああああつ♥♥♥」

「はあっ、はあっ、しゅごいです♥もう神威の子宮は満タンです♥」

「ふふつ♥力が逆流して母乳が溢れちゃいました♥」
「これは皆さんに飲ませるモノなので溢れすぎると困ってしまいますね♥」

「そりゃあ、中毒になつた娘でもう原液を飲ませても
体の疼きが止まらない娘がいましたね！」

「はい！ではその娘を近々に連れてきますね♥」

はあ、り

あ、り

はあ、り

「ああなつたら、一回主人様に抱かれただけで
もうメロメロになつてしまひますからね♥」

「ふふ♪皆さんがそうなるのが楽しみです♥」

「エ!!あなたがこここのBOSSね?」

「このアイオワを捕まえるなんてやるじゃないで、こんなポーズさせて何する気?」
「What? あなたに従うまでらのXをする?」

「ふふん、やれるものならやつてみなさい! このアイオワを舐めないことね!」

「ん、んんつ！なかなかいいモノを持つてゐるじゃない？」

「でもそれくらいじやこのは堕とせないわよ！」

「んつ、あんつ、ほらほらどうしたの？それで終わり？たいした事ないわ……ひやあん！」

す
よ
へ
う

「えつ！？い、いまのは奥を突かれてただビックリしただけで…ああん！」

「Time Time!そんな弱いところばかり攻めるのは卑怯よ！そんなに突かれたら…」

「ん、んんんんんんつ！」

「はあつ…はあつ…Shift、このアイオワが簡単にイカされるなんて…」

ドビュウ

「でも、あなたも射精したからこれで Cock は小さく…
つて、なんでまだ大きいままなの！？」
「ちよつ！まさかまだする気！？」

「あつ、あんつ、あんつ！なんで男はみんな一回射精したら小さくなるはず！」

「あんつ、やあんつ、NO! NO!! また弱いところばかり攻めないで！」

「はあんつ、イッたばかりなのにまたイカされる…」



「はああああああああんつ！－！」

「はあつ…はあつ…こんな短時間で二回もイカされるなんて始めて…」

びゅるわ

「それにまだMeの中で大きいままなんて、このCockすご過ぎるわ…」
「NO…イキすぎで何も考えられない…」

ビクッ

ビク

「まだするんでしょう？早く動いてよ、あなたのSEX気持ちよすぎてハマりそう♪」
「What? あなたの女にならないじこれ以上しない?」

「NOーそんな」と言わないで、あなたの女でも奴隸でもなるからSEXして!」
「Yes!」のアイオワはマスターの雌奴隸になります!
「つでも僕でもMeeVaginaを使って!」



「Oh! yeah! Meのボルト が変化してます...」

「It feels really good!」



「Oh~♪これがMeのNew body~ふふり♪前よりPowerを感じるわ♪」

「これなら、何回イカされてもSexじゃねり♪」

「Hii~わ~りやくマスターのCockをMeのVaginaに入れてちようだい~♪」

「What?..おチンポにおマンコ? 日本語ではそう言うの?」

「Yes~♪これからそう呼ぶわ♪Meのおマンコにマスターのおチンポを突っ込んで♥」

『あんつ♥あんつ♥Oh, yeah♥マスターのテクニック、パーfectよ♥』

「むこう【アメリカ】でも鎮守府でも、

『こんな【Best】なおチップを持つた人はいなかつたわ♥』

『みんな、ただ腰を振るだけで【め】より先にイッて満足できなかつたけど、

『こんなに満たされたのは初めて♥』

『んんつ、もうイキそう! マスター、
一緒にイキましよう? 今度は【me】のBody♪沢山かけて♥』



「はああああああああんっ♥♥♥」

「はあっ、はあっ、いっぱい出してくれてThank you♪

「Oh! Good smell♪ これだけでイッたばかりなのに、またSexしたくなっちゃうわ♥」

10

A close-up illustration of a character's face, showing long, flowing white hair and a determined expression. The character has a red and black striped headband and a yellow and red striped collar. A large, stylized red 'X' mark is overlaid on the left side of the frame.

「OK! マスターが満足するまでアイオワのBodyを好きなだけ使って♥」
ビン

「さあ提督、ご主人様と僕のいろいろなエッチを見せてきたけど、
どうだつたかな？」



「ふふつ♪もう夜も明けてしまつたからこれで今日のエッチは最後だよ？」
「と言つても提督にとつては人生最後に見る、
女の子がエッチなことをしているところだけどね♪」
「後悔のないようにしつかり目に焼き付けてね提督♪」
「僕とご主人様のラブラブセックス♥」

「ふふつ♪やつぱりすごいねご主人様のおチンポは、
あんなにしたのに全然萎えないよ♥」



「んうつ！パンツ越しにこすり付けられてるだけなのに僕のおマンコ、
トロトロにとろけてしまつてるよ♥」

「どうだい提督、提督も入れてみたいかい？」

「ご主人様に調教されて男を喜ばす事に特化した僕の淫乱おマンコ♪」

「ふふつ、入れたそうだね♪」

「ああ、もちろん提督が僕のおマンコに入れることはないよ？」

「だつて提督のおチンボじや絶対感じないように改装されてるからね♪」

「さあ提督、提督じや絶対勝てない

極太おチンボが僕のおマンコに入つていくよ♪」

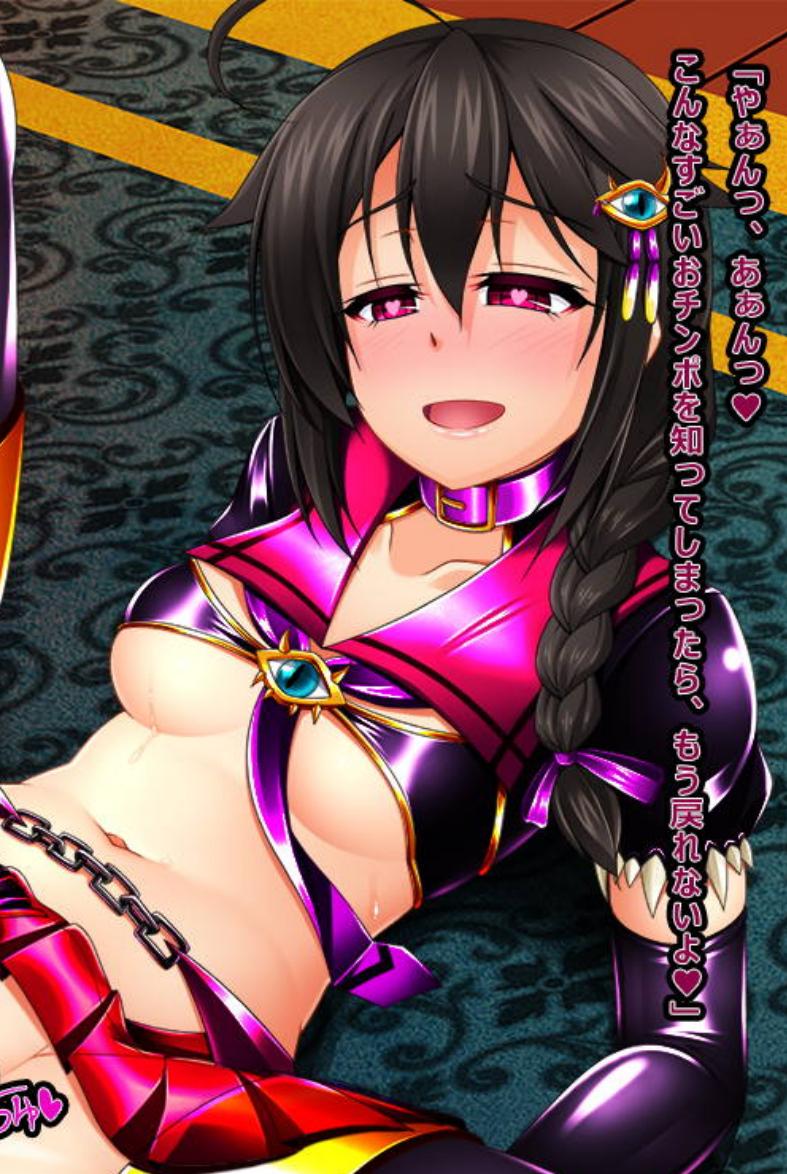
「あつ、はあんつ♥入つてきたよ♥
僕のおマン♪、うれしくて勝手に締め付けちゃつてる♥」



「やつぱりご主人様のおチンポは最高だよ♥
ご主人様の命令で他の男ともエツチしたけど、
みんなご主人様の足元にも及ばないだらしないおチンポだつたからね♥」
「僕の中に入れたら、すぐにイッてしまつて、
10回もしないうちに『もうやめて』って泣きじゃくつてたよ♪」
「それに比べてご主人様は何回しても萎えないし、
逆に僕が気絶してしまつて申し訳ないくらいだよ♪」

「やあんつ、ああんつ♥

こんなすごいおチンボを知つてしまつたら、もう戻れないよ♥」



『その証拠に、ここには僕も含めて
ご主人様のために鎮守府を裏切つた艦娘が大勢いるんだ♥』

『捕まつた提督たちは、

艦娘達の慰み者にされたり、演習の標的にされたり、
色々な末路をたどつてゐるんだ♪』

『でも提督は幸運だよ？』

自分の艦娘に殺されないし、気が狂いそうな調教もない、

ただ一人でさびしく牢屋で生きていいけるんだから♪よかつたね♪』

『んうつ、ご主人様、そろそろ出そうかい？

それなら僕の体にかけて欲しいな♥

ご主人様の臭いに包まれながら僕イキたいんだ♥』

「んつんんんんう♥♥♥…はあつ、いい臭い♥それにどつても暖かい♥」
「ふふつ♪自分の艦娘だつた僕が他の男に汚されてどんな気持ちだい提督♪」

びるる

ぬちゅあよレ

「実は、提督が僕とケツコンを目指してたのを知ってるんだ♪
でも見ての通り、もう提督が付け入る隙が無いくらい、
僕の心と体はご主人様の色に染められきつちゃつたんだ♪」
「ん?もう一回しててくれるのかいご主人様?
ふふつ、よかつたね提督♪オマケでもう一回見られるよ♪」

「はあんつ♥ご主人様の精液で滑りがよくなつて気持ちいい♥」
「さつき精液をもらえなかつた子宮がさびしくて降りてきちゃつてるよ♥」



「赤ちゃん産みたい、早く孕ませてくださいって
僕の子宮がご主人様におねだりしてる♥」
「提督、知ってるかい？ 艦娘は女の子しか産めないんだ♪
本当だつたら提督の娘を産むはずだつた僕がご主人様の娘を産んで、
その娘と僕でご主人様にご奉仕をする、考えただけでゾクゾクするよ♥」

「あんつ、はあんつ：：あひいん♥
どうしたのご主人様あ？急に激しすぎるよお♥」



「そんなに孕みたいなら孕ませてやるつて？
本当かい！？僕、ご主人様の赤ちゃんを産んでもいいのかい♥」
「うん、ご主人様が望むなら何人でも生んでみせるよ♥」
「あつ、あんつ！いいよ、もつとついて♥
僕の子宮が壊れるくらいついてえ！」

「ご主人様♥僕、キスしたい！」

クスしたい！

「ちゅつ！れろれろ、れろつ！じゅるつ…じゅぶりゅるるつ、

「ご主人様あ、ご主人様あ♥…んつ…んんつ、
れろ…じゅるつ…じゅるるる…じゅるる…んふ…れろ」

「ダメつ、ダメダメえつ！僕もうライツちやう！」

「はあつ：はあつ：一杯でてるう♥僕、とつても幸せだよお♥」
「こんなにあふれるくらい出してもらつたら、
すぐに赤ちゃんできちゃうね♥」

「ああ、そうだつた、
ふふつごめんね提督♪夢中になりすぎて忘れていたよ♥」
「名残惜しいかもしないけど、提督が見られるのはここまでだよ
さあ、牢屋に行く時間だ♪」
「もし赤ちゃんができたら、そのときは報告だけはしてあげるね♪
んつ、どうしたんだい提督？」

「あ～あ、そんなに僕たちの子作りセックスがショックだつたのかな、
気絶しちゃつてる♪」

クスクス♪

「うん、これは僕がちゃんと
牢屋まで持っていくから安心してご主人様♥」
「いつまでもご主人様の部屋に
こんなのは置いておく訳にはいかないからね♪」
「それより、明日からが楽しみだね♥」
「早く赤ちゃん生みたいな、ふふつ♥」



「提督、今日のオツパイのお時間ですよ♪」

「やあん♥ そんなに焦らなくても神威のオツパイは逃げませんよ?」

「ふふつ、提督もすっかり神威特製のオツパイミルクの虜ですね♪」

「今日は特別にオツパイちゅばちゅばしながらこのオナホールでヌキヌキしてあげます♪」



「今回も提督のおかげでまた一つ、鎮守府を制圧することができました♪」
「その情報のおかげでご主人様からたつぱり褒めてもらえたので
提督にも神威からご褒美です♪」

「ほら、プルプルしたオナホールの中に提督のおチンポが入っちゃいますよ♪」

『わあ、すごいです！オナホール越しでもとつても熱いですね♪』

『そんなに待ち遠しかつたですか？』

『そうですよね、一月の間オツパイミルクだけでおチンポはずつとおあずけでしたもんね♪』

ヌレヌレ...

「それでは動かしていきますね♪ほら、シコシコ、シコシコ♪

「提督もいっぱいオツバイちゅばちゅばしてくださいね♪
それに合わせてオナホールを動かしてあげますから♪」

「シコシコシコシコ♪ユブニユブ♪ユブニユブ♪グングングング

『ふふつ、おチンポピクピクしてきましたよ♪
キンタマもこんなにパンパンで、もうイッちゃいそうですね♪』

「はい、ストップです♪一回抜いちやいりますね♪」

「そんなに泣きそうな顔をしてもダメですよ?」

「忘れちゃつたんですか、神威が許可しないと射精はめつ!ですよ♪」「ほら、少し落ち着くためにオッパイだけに集中してください♪」

『んんうつ♥そうですよ、そうやつて乳首を舌で転がして
たまに軽く噛んだりして、ああんつ、神威も気持ちいいですよ♪』

「ふふつ、落ち着いたようなのでまたオナホール、入れちゃいますね♪」
「提督の我慢汁とローションでさらにネバネバして、さつきよりも気持ちいいでしょう？」

「ほらほら、いくら気持ちいいからってオッパイちゅぱちゅぱは休んじゃダメですよ?」
「そんなんじやオナホールを動かしてあげませんからね??:ふふつ、いい子ですね♪」



「ほら、もうちよつと我慢できたら最高の射精をさせてあげますよ？頑張ってください♪」



「ああん、あつ、ダメっ！」

「提督！ 神威はまだ射精許可だしてませんよ？ それなのにイッてしまつて…」

「出ちゃわないようにオナホールを締め付けましたが、少しあふれてしましました…」

「これはミオシオキヽが必要みたいですね」

「そうですね… そうだ！ 今提督、中途半端にイッて逆に辛いですよね？」

『それを100回できたら今日は許してあげます♪

壊れちゃうかもしだせんが頑張つてくださいね♪』

「では早速、動かしていきますね♪

「今度は勝手にイかないよう、ずっと強く握りながらしてあげます♪」

「提督の精液も追加されて、さつきよりもすべりがよくなりました♪

これなら早く終わらせられそうです♪』

『ほらほら、頑張つてください！神威の言いつけを守れない提督が悪いんですからね♪』

『それでは一回目の射精をしていいですよ、はい！びゅう♪』

「あはつ♪提督のおチンボが、神オナホール中で暴れています♪

「ダメですよ？ そんなに暴れても締め付けは緩めてあげません♪
『苦しいですよね？ 思いつきりイキたいですよね？』

「オシオキを耐えられたら、思いつきりイカせてあげますからね♪』

「あはつ♪提督のおチンボが、神オナホール中で暴れています♪
『それでは続きを始めますね♪』

「あつ、オツパイは自由にちゅぱちゅぱしていいので頑張ってくださいね♪』

「それでは続きを始めますね♪』

「ほらほら、がんばれ♪がんばれ♪」

「んつ、頭がおかしくなつちやう？もう、提督の自業自得なんですから知りませんよ♪」

「でももし100回耐える前に壊れちやつたら

提督は廃棄処分になつて、もう神威のオツバイミルクも飲めなくなつちやうんですよ？」

「だから頑張つてくださいね♪あとたつた9回ですよ♪」

チユル
ルル

アコ

アコ

アコ

「提督、最近精液の量が少ないみたいですね？
みんなに搾り取られて元気なくなつちやつたのかな？」
『大丈夫♪私提督のおチンポを元気にしてみせますから♪』

『まずは、私のお手手でシフタフしちゃいますね♪』





「はい、ストップダメですよ、射精したら？」

「提督には限界まで我慢して、最高の射精をさせてあげるんですから、『では、おチンポも少し落ち着いたみたいですから』

シコシコ再開しちゃいますね♡』



「ふふつ、射精したいのに射精できないのは辛いですか？」
「でも我慢ですよ？我慢に我慢をした射精は最高なんですから」
「ほら、さつきよりも少し早くて、手の動きも微妙に違うでしょ？」

「射精の快感はおあづけなんですから、
私のお手手の感触をたっぷり楽しんでくださいね♥」





「はい、ストップ♪今、勝手にイニシアとしてたでしょ♪」
「もし、勝手に射精したらいいのオ・カ・オ・キシタやりますから♪」
「では、再開しますよ♪シベルタバ・タベルタバ♪」

「でも提督、約束は約束ですよ？」

「これからいつちのオシオキをしてあげます♪」

「もちろん、私がもう提督の艦娘じやないって現実を痛感してもりうために、この姿も変えちゃいますね♥」

「あー、我慢できたら、
提督の艦娘だつた頃の格好のまま優しく握り取つてあげたのになあー♪」



「ふふつ、どうですか提督？この姿を見ると悔しいでしょう？」

「私がご主人様のおチンポに調教されて提督を裏切つたり」

「鎮守府の船娘がみんなご主人様の雌奴隸にされてたり、

提督も大本営を騙すための連絡役として

特別に生かしてもらつてるつて事を思い出しました？」

ニヤニヤ

「そうですか♪射精の快感ですっかり忘れてるのかと思いました♡」



「やっほーそう、オシオキですね♪本日のオシオキは…』

今度はイツてもイツても手を止めないで、射精し続ける射精地獄です♥」「ほらほら！さつきとは比べ物にならないくらい激しくじごりちやつてますよ？」

地獄です

又
이
국
어

10

「あはっ♥我慢せぬ思いつきりイケたから量が多いですね♪

「でもお手手は止めませんよ♥」

「そうですね～…10回ほどイッたら

ご褒美にこのオツバイでシゴいてあげますね♥」

「そして、精液が出なくなるまで絞りとつてあげます♥」

アツバイ

マラソン

アキリ

「あつそりいえば、私の次は飛龍の相手でしたね？
ふふつ、精液出なくなつたら飛龍、
きつと怒つて、オシオキ、されちやいますね♥」



「利根姉さん？あら、提督でしたか♪」

「ふふつ、そんなに怖い目で見ないでください、確かに私は鎮守府を裏切りましたが、それもこれも利根姉さんとご主人様のためなんですよ？」

「ご主人様が鎮守府を陥れたら、ご褒美に利根姉さんも私と同じにしてくれるって約束してくれたんです♪」

リラ

「そんなわけで、今から利根姉さんと一緒にご主人様に愛してもらう予定だつたのですが、連れて来る娘が間違えちゃつたのかしら？」

「まあ、利根姉さんも私との戦闘で疲れてるでしょうし少し休ませてあげましょう♪」

「提督も折角ですから、私がご褒美を貰うところを見学していつてくださいね♪』

「んつ、あんつ♥、見えますか？」

『ご主人様の極太おチンポが私のお尻にズブウツって入つてきましたよ♥』

「お尻には何度も入れてもらつたので、
もうご主人様の形にピッタリの専用オナホになつてます♥』

利根姉

「あんつ、やあんつ、はあんつ♥ご主人様、最初から激しいです♥」
「提督？私、こんなにお尻で感じるエツチな娘にされちゃつたんですけど、
実はまだおマンコは処女のままなんですよ？」



「ご主人様のお情けで、処女を捧げるときは利根姉さんと一緒にしてもらえるんです♪」
「ああ、利根姉さんと一緒に処女を失えるなんて、楽しみすぎでおマンコイツちやいります♥」

「んつんんんんんんつ♥はあつ：はあつ：」

「申し訳ありませんご主人様、私だけ先にイッてしまつて」

「お詫びに次は、私もご主人様のおチンボが気持ちよくいけるように頑張りますね♥』

「ふふつ、そうですね♪

折角提督も見ていてくれるのですから、次は元の姿で愛し合いましょう♪』

「さあ、よく見ていてください提督♪これがご主人様に忠誠を誓つた雌奴隸の姿ですよ♥』
「提督の元に居たころは知れなかつた、
淫らな快楽に負けて逞しい殿方に尽くす喜びを知つた艦娘の末路です♥』

「いざれ、利根姉さんだけではなく、
すべての鎮守府の艦娘達がこの快楽の虜になりますよ♪』



「ふふつ、どうですかこの姿♪エッチで素敵でしょう?」

「それに力も以前より増して、とつても強くなつたんですよ?」

「つて、あらあら♪筑摩の色々な所が丸見えになつて興奮しちやつたんですか?」

「鼻息、荒くなつてますよ♪」

ニヤッ

「変態ですね、提督♪でも提督は私の体に触れることはもうできないんです♪」
「私の体に触れていいのは、利根姉さんとご主人様だけですから♥」

「あんつ♥お待たせして申し訳ありませんご主人様♥

「存分に筑摩のお尻を堪能してください♥」

「でも利根姉さんの分はちゃんと残しておいてあげてくださいね♥」

「あんつ、あんつ、はあんつ、ズブツズブツつてお尻の奥突かれて、気持ちいいです♥」

「あんつ、ダメえつ、そんなに早く突かれたら私もイッちやいます♥」

「ご主人様も出ちやいそうですか？」

「それでしたらお尻の入り口を絞めますから一緒にイキましよう♥」



「ふわああああああんつ、はあつ：はあつ：ふふつ、私もイッてしましました♥」

「はあ、暖かい♥これをおマンコで受け止める時が楽しみです、ふふつ♪」

「お疲れさまですご主人様♥少し休憩なさいますか？：きやつ！？」

「ふふつ、さすがですご主人様♥出したばかりなのにもう私の中で大きくなっています♥」

「はい♥私の事はお気になさらず動いてください♥」



「やあんつ、はああんつ、ああんつ、んんーつ、あつ、ああんつ♥」

「えつ？：：はい、自分で乳首を舐めてご主人様をもつと興奮させますね♥」

「ペろ、ペロペロペロッ、ペロロッ！ぐつちゅ、ひめほつ…ベーロッ」

「あんつ、ダメですご主人様！私、もうイツちゃいそうです！」

「ご主人様も一緒にイツてください！イクッ、イクイクイクーッ♥」



「はあつ・はあつ・はあつ・はあつ・」

「お腹の中のザーメン、いっぱいでタップタップ言つてます

それにブピュッてお尻の穴からも溢れてきてますね♥」

「とつても素敵でしたご主人様♥」

「あつ、ごめんなさい提督♪ご主人様とのアナルセックスが気持ちよくて忘れていました♪」

「そうですね、利根姉さんもそれそろ起きる頃ですし、場所を移しましょうか♥」

「提督も見ていきますか？利根姉さんが私と同じくご主人様の女にされる瞬間を、ふふつ♪」



利根「筑摩！なぜこんなヤツの言うことを聞いておる！」

早く拘束を解くのじやー！」

筑摩「ふふつ♪ダメですよ、

利根姉さんには主人様の素晴らしい事を知つてもらつて

私と同じ身も心も痺れる肉奴隸になつてもらう事なんですから♪』

利根『何を言つておるのじや…くつ、おぬし！筑摩に何をしたのじやー！』

筑摩「ほら、見てください姉さん♪ご主人様のおテンポ♥
あれが今から姉さんのカワイイおマン♪♪ずぶらーつて入つていくんですよ♥』



利根「なつ！？そ、そんなモノ吾輩の中に入るわけが…ひぎいいいいいい！」

筑摩「あらあら、姉さんのカワイイ初物おマンコに

ご主人様の極太おチンボが入りましたね♥」

利根「ひつぐう！ちつ筑摩：たすけ！」

筑摩「姉さん我慢です！痛いのは最初だけですから♪

すぐに気持ちよさが勝つて病みつきになりますから♪」



利根「うぐっ、ひぎいい！そつそんなに動くにやあー吾輩が壊れてしまふっー」

「ああ、いい、んつ、んふう、んんつ！」

「あつ、あうつ、あひいいつ！ダメじや：頭がぼーっとして何も考えられいやう…」

「あつ、ぐううつ：何じや？吾輩の中でさらに大きく！？」





利根「なつ、赤ちゃんじやと…そんなのダメじや…吾輩には提督が…」

٦٧

七

利根「ひぐううううううつ！？何か熱いものが吾輩の中に…ーー？」
筑摩「ふふつ♪それはご主人様の子種汁です♥



利根「ううっ…いやじや、聞きとうないー」

筑摩「でも姉さん、すごく気持ちよかつたでしょ? 最初は痛がつていたけど、途中から発情したメスの声に変わつてました♪」「ご主人様のおチンポを味わつたら、もう普通の男性では満足できませんよ? たとえ相手が愛する提督でも♪」「きっと、姉さんと提督が結ばれても毎晩満足でさす、ご主人様とのセックスを思い出してせつない日々を送るだけですよ?」

筑摩「ふふついんですよ姉さん♪姉さんは何も悪くないんです♪
悪いのはご主人様に対抗できない駄目提督の事なんか忘れて
筑摩と一緒にご主人様に仕えましょう♪」

利根「提督を…忘れる…？」

筑摩「そうですね♪そうすれば、毎日気持ちよくて楽しい日々を送れますよ?
ですから、この感覚に抗わないでください♥」

利根「提督を…忘れる…？」

利根「なんじや…筑摩の言うことがとても心地いい…。
そうか、吾輩が間違つておつたのか…。」



筑摩「やりましたね♥姉さんならわかつてくれると信じていました♪」

利根「うむ、なにやら頭も冴えて最高の気分じゃぞ！」

吾輩の目を覚まさせてくれて、筑摩とおぬしには礼を言わねばのう♪

「むつ、おぬしでは失礼か…ご主人に筑摩よ礼を言うぞ♪」

筑摩「ふふつゝやはり元気な利根姉さんが一番です♪」

では姉さん、ご主人様の肉奴隸になつた証におマンコで

ご奉仕をしてみてはいかがですか？」



利根「おおつ、それはいい考え方じゃ！さあご主人よ、吾輩を好きなように使ってくれれ♥」

利根「んんつはあああんつ♥♥♥さつき入れるとときは痛かつたが、今は入れただけでイッてしまいそうじゃ♥」
「いいぞ、もう痛みは感じないからご主人の好きなスピードで吾輩のおマンコをイジメてくれ♥」



「あんつ、あんつ、ふわあつ、満たされる感じじや♥
いままで感じしたことのない幸福感じや♥♥♥」

「んんつ、あひいつ、はあんつ、このまま永遠にセックスしていくが、
吾輩はお姉さんじや♪我慢して筑摩にもこの快楽を与えてやつてくれ♥」

筑摩「そんな、私は利根姉さんが満足した後でかまいま。」

筑摩「ん、ひぐうらうらううつ♥♥♥」

利根「なんじや、筑摩は処女だつたのか?」

筑摩「はい:処女を捧げるときは利根姉さんと一緒にいいご主人様にお願いして...』

利根「愛いヤツじや♪ご主人よ、筑摩の初めてとくと味わうがよいぞ♥』

筑摩「はあんつ、あんつ、やんつ♥これがおマンコでご奉仕する感覚♥』

氣持ちよすぎて私、すぐにイッてしまします♥』



「ご主人様、お願いです♥最初は、私と利根姉さんにかけてください♥』

二人「んんーつーはあああああああああんつ♥♥♥」

利根「はあつ、はあつ、この匂いすきい・大好きじやあ…♥匂いだけでイッてしまうぞ」

筑摩「あつ、んんつ、利根姉さんと一緒に処女を失って一緒にご主人様の匂いに包まれる♥幸せすぎて筑摩はどうにかなつてしまいそ�です♥」



利根「吾輩たちはもうご主人の内奴隸じゃ♥どんな命令にも従うぞ♥」

筑摩「はい♪私たちがこんなご奉仕でもいたします、ふふつ♥」

「はあーい、どうしたの提督？ そんなに目を丸くして♪」

「うふふ、それはそうよね♪ 突然裸にされて、
そのうえ恥ずかしい体勢で押し倒されたんですね♪」

「何する気って、そんなの決まってるじゃない♪ セックスよ♥」

ー♥

「あら、あらあら♪ 提督もまんざらじゃないみたいね♪
こんなにおチンポをビンビンにしちゃって♥」

「もう待ちきれないみたいだし、早速提督のおチンポを私のトロトロおマンコで食べちゃおうかしら♥」

「ほら、見えるかしら？段々提督のおチンポが私の中に隠れて見えなくなってきたわよ♪』
『んっ、どうかしら、私のおマンコ♪』

肉のヒダがおチンポに絡み付いて、まだ入れただけなのにとつても気持ちいいでしょ♪』

『これから動くけど、その調子で大丈夫かしら？
うふふ、すぐにイッたりしないでね♥』

ドロップ

『はんっ、あんっ、いいわ♪ズブツ、ズブツでイヤらしい音を立てとつてもエッチね♪』
『それに、やんっ、こんな体勢で女の子にいいようにされてる提督の顔、
お姉さんどつてもゾクゾクするわよ♪』
『ほらほら、提督も我慢してないで腰を動かして♪それとも、もう出ちゃいそう?』

『うふふ♪出してもいいわよ♪ぜえうんぶ、
お姉さんのおマンコでゴクゴク飲み干してあ・げ・る♥』



「んっ、やあんっ♥いっぱい出たわね♪お姉さんの中もとっても暖かくていい気持ちよ♥』

『うふふ♪どうしたの提督そんな難しい顔をして、まだ出したりないのかしら♪』

『えっ、お前は陸奥じゃないですか？』

『…ふうん、さすが提督、鋭いわね♪半分アタリ♪』



「私はね、貴方に解体処分されそうになつた陸奥なの♪」

「そんな不用品だつた私を助けてくれたのがご主人様♥』

『ご主人様に抱かれて私に生きる喜びを知つたわ♥それにこんなに素敵な力も貰つたの♥』

クスッ♪

『そしてハズレの部分は、私は貴方が大事にしてた陸奥でもあるの♪』

『だつて貴方の陸奥は私が食べちゃつたんですもの♥』

「おかげで、また強くなつてご主人様の役に立てるわ♪

『私が育ててくれてありがとうね、提督♪』

『でも、困ったことがあるのよ、陸奥の想いが強いのか、

貴方を見ると今まで発情してくるの♪』

『本当はただ私を処分しようとした貴方を殺すつもりだったのだけれど、

間を取つて貴方を……』

ゴ

グ

『絞り殺す事にしたわ♥』

「どう、この姿♪ご主人様と、貴方の陸奥に貰った力よ♪」

「どう、とってもエッチでしょ♪ってあら?」

「相当シヨツクだつたみたいね♪貴方の愛した『陸奥』がもうこの世にいないことが♪」

「でも、手加減はしないわよ♪だって私は貴方を絞り殺すって決めたんですもの♥」



「それじゃあ動くわよんんつ、あんつ、あんつ♥」

「ほら、提督が見たかったお姉さんのおっぱいも、
ぶるんぶるんって揺れてどつてもエッチでしょ♥」

「うふふ♪もう何も考えたくないって顔ね♪それならそのまま何も考えなくていいの♪』

『何も考えず、貴方の愛した陸奥と同じ顔をしたお姉さんに、

最後の一滴まで精液をちようだい♥』



「あんっ、はあんっ♥はあっ、はあっ…うふふつ♪あらあら、

『今度は私の体にかけちゃったわね♪』

「んうつ、とっても臭くていい匂いよ♥その調子ですべての精液を私にちようだい♥

「えっ、もうこんな事はイヤなの?まだ抵抗するの…そう

アトヤ
アモル、

あんっ!

『そ、う、ね、だ、つ、た、ら、選、ば、せ、て、あ、・げ、・る、』

『この砲塔でこの世で最悪の痛みを味わつて死ぬか』

『私のおマジ』でこの世で最高の快楽の中で死ぬか』

『あらあら♪ ほえた表情しちゃって♥ その顔、お姉さんヅクヅクしちゃう♥』

『さあ、どちらが望みかしら、て・い・と・く♥』



翔鶴「うふふつ♪やつと捕まえたわ、瑞鶴♥」

瑞鶴「やめて翔鶴姉！お願いだから正気に戻ってー！」

翔鶴「ふふつ♪元気みたいでお姉ちゃん安心したわ♥」「でもだめよ？ここに来るまで」「ご主人様を散々困らせたみたいじゃない？」

瑞鶴「あいつは敵だよ！」

翔鶴「もう！またご主人様の事をそんな風に言つて！」「そんなヤツをご主人様なんてなに言つてるの翔鶴姉！」

翔鶴「もう！またご主人様の事をそんな風に言つて！」



瑞鶴「えっ、ちょっと、何してるの翔鶴姉！そこは汚いよー！」



翔鶴「ふふつ♪瑞鶴に汚いところなんて無いのよ♪」

「ほら、瑞鶴のおマンコから愛液が溢れてきた♪

キラキラしててとっても綺麗よ♪」

瑞鶴「あんっ、ダメっ、翔鶴姉！そこばつかイダられたら私っ…」

翔鶴「我慢しないでイッていいのよ瑞鶴姐お姉ちゃんが見ててあげるから♥」

瑞鶴「ん、んんんんんっー！」

「はあつ、はあつ、なにこれ！頭が真っ白になる！」



翔鶴「ふふつ♪気持ちいいでしょう？」

瑞鶴もごつちにくればいつでもその感覚を味わえるわ♪」

「そうね♪もうひとつ瑞鶴のかわいい姿を見ていたかつたけれど、

そろそろ準備を始めましょうか♪」

瑞鶴「ふえ？準備つて！なにするつもりなの翔鶴姉？」

翔鶴「大丈夫、最初は痛いかもしれないけど、直に気持ちよくなるわ♥」

瑞鶴「アタツーなにー？私のおっぱいになにを注入してるのー！？」

翔鶴「うふふふ♪このお薬はね、欲望に素直になつて私たちと同じになれる特別なお薬なのよ♪」

瑞鶴「いやつ、私みんなみたいになりたくない！助けて翔鶴姉！」

翔鶴「うふふつ、だーめ♪」



瑞鶴「えつ、なんで！？私のオツパイが大きくなってしまった！」



翔鶴「あら？副作用があるって聞いてたけど、こんなに大きくなるのね」
「でも大丈夫、小さいおっぱいも可愛かつたけど、大きいおっぱいの瑞鶴もとつても素敵よ♪」
瑞鶴「やだ、おっぱいが熱くなつて…頭もボーッとしてきた…」
翔鶴「うふふつゝそろそろ変化が始まるわよ♪」

瑞鶴「翔鶴姉え、怖いよ、自分が自分でなくなっていくみたい…」

翔鶴「大丈夫、瑞鶴はただ生まれ変わるだけ♪ そうすれば、私たちはずっと一緒にいられるのよ♪」

瑞鶴「ずっと一緒に…」
翔鶴「そう、ずっと一緒によ♪だから瑞鶴、怖がらず【その欲望を素直に受け入れて♥】



翔鶴「うふふ、やつたわね瑞鶴♪その姿、とっても素敵よ♥

瑞鶴「ふふつ、最高の気分よ♪いままで我慢してた私がバカみたい♪」

翔鶴



翔鶴「これで瑞鶴も一緒に主人様にご奉仕が出来るわね♪」

瑞鶴「うん、そうだね♪でも先に反抗してたのも謝らなくつちや」

翔鶴「私も一緒に謝つてあげるわ♪」

でもその前にもうちょっとおマンコを濡らしておいたほうがいいかしら?」

翔鶴「えいっ♥」

瑞鶴「ひやあつ♥ 翔鶴姉、不意打ちはするいよ♥」

あん♥



翔鶴「うふふつ、ごめんなさい♪じやあ不意打ちついでに、この美味しそうに育つたおっぱいも味見させてもらうわね♥」「れろるんつ、れえろん、ちゅばつ、うふふつ、とつても美味しい♥」「これならご主人様も満足してくださるわ♥ れる、れるつ」

瑞鶴「あつ、んんつ、ちょっと翔鶴姉え、舐めすぎ♪」

大きい赤ちゃんみたいだよ? あんつ♥」

翔鶴「あら? それじゃあ赤ちゃんはこんな事できるかしら?」

瑞鶴「えつーちよつ、ちよつと待つて！んんっ♥ダメツ、激しすぎ♥」

翔鶴「赤ちゃんにはこんな事出来ないでしょ♪
このまま瑞鶴がイクまで激しくしてあげる♥」

瑞鶴「あつ、んんうつ、やんつ♥そり、そこ気持ちいい♥」
翔鶴「ココ？うふふつ、じゃあ一杯ココをせめてあげる♥」
瑞鶴「やんつ、はあんつ、もうダメツ、イッちゃうー！」



瑞鶴「ひやあああああああんつ♥♥♥♥♥」

ビワッ



ビワッ

ビワッ



ツニヤアマアマア

ビワッ

翔鶴「ふわあつ♪イツた時の瑞鶴の顔、何度見ても可愛いわ♥」
瑞鶴「はあっ、はあっ、翔鶴姉♥すごい気持ちよかつた...」
翔鶴「うふふつ、かわいい私の瑞鶴♥これからはずつと一緒によ♥」
瑞鶴「うん、翔鶴姉♥」





翔鶴「最初は私と瑞鶴のおマンコでご主人様のおチンポをやさしくスリスリしていきますね♥」

瑞鶴「えつと、これでいいの翔鶴姉？」
これで本当に気持ちいいの？」

翔鶴「ええ、大丈夫よ♪

ほら、おチンポも気持ちよさそうに

ピクピク跳ねてるでしょ♥」

瑞鶴「本当、よかつたー♥

安心したら私もだんだん気持ちよくなつてきちゃつた♥」

すりっ

すりっ

すりっ

すりっ

翔鶴「そうね、私もおチンポがクリトリスを刺激ってきて気持ちいいわ♥」

ふふつ、ご主人様もイキそうね♪では最初に軽くイッてしまつてください♥」



瑞鶴「イツ、痛つ！ご主人様が私の中に入ってきた
痛いけど、それ以上に気持ちいい♥」

翔鶴「瑞鶴♪処女喪失おめでとう♥

これであなたも立派なご主人様の女ね♥」

瑞鶴「うん、ありがとう翔鶴姉♥
私、翔鶴姉と同じ、ご主人様のメス奴隸になれたんだね♥うれしい♪」

翔鶴「瑞鶴、うれしいのはわかるけど、
あまりご主人様を待たせてはダメよ？

ちゃんとご奉仕をしなきゃ♪」

瑞鶴「そうだね、それじゃあご主人様、
私の初物おマンコ、たっぷり堪能してね♥」

瑞鶴「ふわっ、ああんつーはあつ、はあつ、んつ、んつ、あつ、あんつ、あはんつー」
翔鶴「ふふっ、上手よ瑞鶴♡一生懸命腰を振つて、食べてしまいたいくらいカワイイわ♡」

瑞鶴「やあんつ、翔鶴姉え、茶化さないでよお
あつ、あつ、ああんつ♥」

瑞鶴「はあつ、はあつ、なに?ご主人様のおチンポが中でじくびくしてきた?」
翔鶴「それはご主人様が射精するときの合図よ♪ほら、おマンコを締め付けてみなさい♥」



瑞鶴「あはあああああああああああああん♥♥♥♥
私の中に精液入ってくる♥しょごい！これしめごいよ翔鶴姉♥』

翔鶴「あらあら、瑞鶴つたらトロけたお顔しちやつて♥
でもしようがないわね、初めての中出しですものね♪』
瑞鶴「はあつ：はあつ：気持ちいい♥』
こんな気持ちいい事を自分だけ知つてたなんて、翔鶴姉え、ずるいよお♥』

翔鶴「うふふつ、ごめんさいね♪
でもこれからは瑞鶴も一緒に気持ちいい事を
いっぱいしてもらえるのよ♥』
瑞鶴「それもそうだね♥だつたらご主人様？
今度は翔鶴姉に入れてあげて♥』
翔鶴姉が乱れるところを見てみたいな♥』



翔鶴「あつ、はあんつ♥

もう、ご主人様、いきなり入れたらピックリしてしまいますよ♥」

ニヤニヤ

瑞鶴「うわあ、すごい！

翔鶴姉のおマンコ、ご主人様のおチンポと一緒に飲み込んでやった♪

翔鶴「ふふつ♪瑞鶴のおマンコ汁と

ご主人様の精液のおかげで滑りがよくなってるおかげよ♥」

瑞鶴「ご主人様にいっぱいしてもらつて、

おマンコがご主人様の形になつてるせいじゃないのか♪

「いいな～私も早くご主人様の形に変えてもらいたいな～♪」

翔鶴「瑞鶴もすぐにご主人様専用に変えてもらえるわ
それではご主人様、そろそろ動きますね♥」



翔鶴「あはん、あん、んつ、んつ、んつ、はああんつ♥

気持ちいいですかご主人様あ？あんつ、あんつ♥

瑞鶴「あんなど激しく腰を振つて…

翔鶴姉、すごくエッチでキレイ♥」

翔鶴「やあんつ、はあつ、はあんつ♥

おチンポが私の子宮をコツコツついて気持ちいいです♥」

「そうです！私は妹の前で淫らに乱れる卑しいメス奴隸です♥」

このおチンポがないと生きていけないのあ♥」

ほん、♥

あん、
あん、
？？

瑞鶴「はあつ♥はあつ♥

ダメ、翔鶴姉のを見てたら私も

また痴畜してきちゃつた♥翔鶴姉え～？」

翔鶴「あんつ、あんつ、なあにすいかんんうつ！？」

瑞鶴「んちゅ、ちゅば…れえろつ、れろれろ、翔鶴姉え♥翔鶴姉え♥ちゅ、ちゅう♥」

翔鶴「瑞鶴う♥もつと舌を絡ませてえ♥れる、れる、ちゅつちゅ♥、れろれろれるつ♥」

翔鶴「ちゅばつ…ちゅ、ちゅう…んちゅ♥翔鶴姉の唾液、おいしい♥もつと飲ませて♥」

翔鶴「じゅつちゅ、じゅつちゅ♥ダメエ、

私、もうイッちゃう！イクイク、いつくううううううううつ♥♥♥」



翔鶴「ん~つ、ふはあつ…はあつ…はあつ…最高に気持ちよかつたですう…♥」
瑞鶴「はあつ、はあつ、翔鶴姉♥すつかりメスの顔をしてる♥私も気持ちよかつた♥」

翔鶴「うふふつ♪どうしますかご主人様？
今日はもうお休みしますか？それともまだいたしますか？」
瑞鶴「ふふっ♪そこなくつちや♥
ご主人様が満足するまで私達の体を使って気持ちよくなつてね♥」

二人「私達の身も心もご主人様の物 なんですから♥ だからね♥」

